

La Lettre

— DE LA FONDATION FRANCO-JAPONAISE SASAKAWA/Bureau de Tokyo —



笹川日仏財団
ニュースレター
Vol. 3 No. 3

日本とフランスの新しい夜明け

日産とルノーが業務提携などあらゆる角度から討議を進めてきたことが大きなニュースとなったが、十年前誰がこのような新時代が来ると予想しただろうか。「教育事情」「技術交流」「マルチメディア」

対日投資の魅力」と題し第九回目のパネルディスカッションを七月二六日、恵比寿の日仏会館で開催。

日本経済低迷の中で、外国資本の果たす役割は大きい。が、それを受け入れる日本側の問題は何かなど専門家の説明を交えながらの討議が行なわれた。

司会は元在仏日本商工会議所会頭、猪瀬威雄氏。対日直接投資が急増しているが、これは一過性のもなのか、永続性のあるものなのかなど活発な討議を期待すると最初に挨拶。

次にパネリストによる対日投資の現状が述べられた。大和総研副理事長、賀来

景英氏は、ここ数年たしかに対日直接投資は急増してはいるが、世界的にみれば尚レベルは低い現状を伝えた。外国法事務弁護士のパネリスト、デュボワ氏は、フランスが今までになく活発に投資活動をしているのは日本に対する期待感だとし、味の素顧問、メルシャン監査役の山本恭右氏は、フランスと長年業務提携を結び成功させてきた実績を元にニーズに応える品質や人材の確保など成功に導いた理由など具体例を持って説明がなされた。

そのあと会場の出席者との意見交換では、日本の規制緩和の必要性、意識変革と組織変革の必要性、海外で通用する人材の育成、外資を差別する傾向など日本の持つ問題点が浮き彫りにされていた。最終的には対日投資の魅力まで議論を進めたい意向があったが、それは引き続きパネル終了後に行なわれたヒューフエでさかんに語られ、両国親善の場となったのである。こうしてみると、パネリストや出席

者に日本人の占める割合が多かったためか、日仏双方の意見交換というよりも、どうしても日本人が意見を述べられる場面が多かったことは否めない。だが一方で、出席者の誰もが日産とルノーの提携を歓迎し、是非とも成功させねばならないという思いを抱き、その協力を惜しまない姿勢が如実に伝わってきた。これからの日仏関係に於いてビジネスの分野でも新しい夜明けが来たことを実感させられる機会となった。

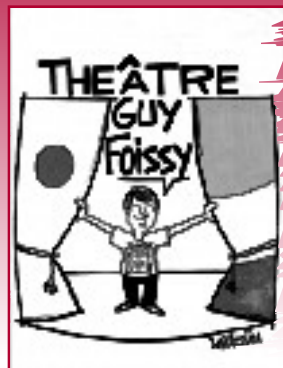


ビジネスの分野でも



フランスの台詞劇

言葉の壁を越えて



フランスの劇作家
ギイ・フォワシイ作
「チェロを弾く女」を
南谷朝子さんの一人芝居で、
8月26日から31日までの
6日間、銀座みゆき館劇場で
上演。フォワシイ氏来日と共に、
演出や音響にも彼と交流の深い
劇団の主宰者である
演出家を迎えた。
フランス人との共同公演、
またこの戯曲が
日本初公演だったことなどが
話題となり、
銀座みゆき館劇場の客席は
連日満員。
千秋楽を迎えて
彼ら一同に話を聞いたが、
カンヌを拠点とする
南フランスの明るさ故か、
終始笑いを伴う取材となった。

フランスのブラックユーモア作家
ギイ・フォワシイ氏の作品に登場
するのは、いつも私たちのごく周辺
にいる一般市民である。ごくあり
ふれた普通の人々の内面に潜む抑
圧された狂気を、独特のユーモア
で描くところに彼の魅力がある。
しかし今回の「チェロを弾く女」
は、一般市民というよりも上流階
級の主婦が主人公。タイトルは示
すとおり、チェロを相手に女の独
白が繰り返される。

その幕開き。

暗転になると、どこからとも
なく黒子のように一人の女性が
現れ、舞台中央にビデオカメラを
セットする。そしてその後、おも
むろにチェロを弾き始めるのだ
が、そのチェロの最初の一言で
見事に幕は切って落とされる。
劇的な内容を予感させるように、
チェロによってまさに引きずり
込まれるように芝居が進行して
いく。

「相寄る魂」「救急車」など
一幕物の名手といわれるフォワシイ
氏の大きなテーマは「夢と現実」
だが、今回の芝居も「本音と建前」
が芝居の底流に流れる。

子供時代は親の気に入られる
ように、結婚してからは夫に気に入
られるように「ふり」ばかりして
きた女が初めて、ほんとうの自分
をチェロの中に発見していく。その
中で引き起こされる悲劇。内向的な
ふりをしてきた女がカメラに向かっ
て行方不明になっている夫との関
係を語っていくという筋立てだ。

この真相が浮き彫りにされて
いくうちに、まるで観客自身が登
場人物として参加させられていく
ような錯覚を起こさせる。初演は
一九九一年、パリのルノー・パロ
劇場。サスペンスタッチのこの芝
居は、中盤以降急速に盛り上がり
をみせていくのである。

フォワシイ氏は、

三三歳で書いた
「事件」で劇作家の
地位を得てから
六七歳となった現在
までいっしょに創作
意欲の衰えをみせ
ることなく、その作品数は六〇を
越えている。フランスのみならず
世界三六カ国で翻訳上演される
人気作家だ。

しかし世界広しといえど、彼の
作品だけを連続上演する劇団があ
るのは日本だけ。ギイ・フォワシイ・
フランスよりも先に
日本で上演された
「救急車」



シアター主宰者である谷正雄氏との
交流は、はや三年にも及び、谷氏
が手掛けた作品は、これまでで三
三作品、上演回数は五二回に及び、
新作が出来上がる、真っ先に
谷氏のところへ送られてくるた
め、フランス本国よりも先に日本
で上演された作品もあるほどのな
のである。

「老いや死を描いた七九年の『救
急車』は、まさに日本初上演の芝居
でも上演後、彼は生まれて初めて
救急車に乗ってしまうというハプ
ニングが起き、因縁つきの作品と
なりました」

楽しい思い出を語る谷氏の横
で、かねてより「演劇とは友情の
アバンチュールである」といって
はばからないフォワシイ氏は、
「ここまできたら、この先のぼく
達はもう結婚しないでしょう」と
一同を笑わせた。

フランス人の感情の つかみ方に苦勞

フォワシイ氏の戯曲
は、膨大な量の台詞
で俳優たちを悩ませ
ることで定評がある。
かつて彼の芝居を演
じた経験のある日本人
女優に「ノイローゼに
なるような気がした」とまで言わ
れたが、今回は特に一人芝居。
約二時間に及ぶ台詞劇を一人で
観せていくため、俳優の技量が試
される芝居ともいえた。主演女優で
ある南谷朝子さんに、早速その台詞
を覚える苦勞を聞いたが、一九九七年
NHK名古屋アクターズフェスティ
バルの一人芝居「わたし、うれしい」
(鈴江俊郎作、宮田慶子演出)で、
金賞を受賞する実績の持ち主だけ
に、それはなほ簡単に否定。最も
苦勞したのは、感情をつかむこと
だったという。

「とにかく人に対する要求の度合
いが日本人とは明らかに違いま
す。カメラに向かって、言っただ
けですが、もっともっと強く演
出に指摘されました。でも日本人
にしてみれば、半分怒鳴っている



も入り交じり、複雑な心境
だったという。

としか思えない。実際に演じてみ
たら、一番前の席の人は耳をふさ
いでいましたからね」

しゃべることで 最大限表現 しようとするのが フランス人

七年前、フランス
でブイソン女史の
ワークショップを
受け、その演出
手法に惚れ込み、
今回の演出を彼
女に依頼したのは南谷さん自身で
もあった。

「古典を大仰に演ずるのではなく、
現代の私たちのごく普通の会話と
して捉えていたことに興味を持ち
ました。彼女は、古典の言葉さえ
もいきいきと現代に息を吹きかえ
させる術を持っている。せつかく
フランスの芝居をやるのですから
彼女を通してフランス人の内面を
つかみたいと思いました」

南谷さんがフランス人に演出して
もらったのが初めてならばブイソン
さんも日本人を演出するのは初め
てである。

ブイソンさんは一九八三年に
彼女が主宰する劇団「73 カンヌ
劇場」を率いてギイ・フォワシイ作

「救急車」を東京名古屋などで
公演して以来、二度目の来日
だ。俳優でもある彼女だが、
当初「まるで俳優さんのよう
にあがってしまった」というが、
文化の違う東洋人を演出する
という「新しい冒険」の期待感
も入り交じり、複雑な心境
だったという。

激しい演劇事情の 中で温めてきた 二人の友情

特に今回の芝居の中でチェロ
演奏の果たす役割は非常に大き

「言葉が違つので、そのニュアンス
も当然違つてくるため、演技がど
う違つかを把握しきれない難しさ
がありました。怒りでも、もっと
メリハリをつけたかったのです
が、その強さが私の持っている怒
りと微妙に違う意味にとられては
いまいか。果たしてどう伝わっ
ているのか。違っているならばど
う調整すればいいのかなど皆目検
討がつかず、最初は悩みました。
しかし通訳に俳優でもある人が
ついてくれたことで何度も何度も
確認しながらつくることが非常
な助けとなりました。出来上がり
には、私自身満足しています」

南谷さんもうた一週間だったが
演技を通してフランス人の饒舌さ
を自分の中に住まわせることがで
きたことは興味深かったという。
「必要なこと以外しゃべらないのが
日本人。しゃべることで最大限の
表現をしようとするのがフランス
人。喜怒哀楽私にとってはとても
い体験でしたが、もう少し長かつ
たら疲れていたかな、というのも
正直なところだ」

この作品は演出

だけでなく、音響
にもフォワシイ氏
らの仲間である
ジャン・クロー
ド・ブラガンティ
さんを迎えた。



かった。芸大卒業後フランスの名
チェロ奏者、レーヌ・フラシヨ女史の
薫陶を受けた毛利巨摩さんの演奏
はその期待に十分応えてくれた。
同時にその選曲はブラガンティ氏
女の内面性を豊かに表現する曲と
してハガリーの作曲家ソルティン・
コダーイの曲を起用。彼のセンス
を伺わせた。曲だけをアンコール
したくなるという声もあがって
いたほどである。

聞けば、今回のこのメンバーは
谷氏とフォワシイ氏を介して皆
それぞれが親交のある仲間である。
それも谷氏の長年の積み重ねが
あってこそ生まれたもの。決して
一朝一夕には成り立たない舞台の現
状だったのである。

日本の現代演劇で採算のとれる
劇団は非常に少ない。その中、た
だ一人の作家で、しかも翻訳物を
二〇年以上続けてきた谷氏の努力
は察するに余りある。フランスでも
現代作品を上演するのは限られた

劇団に過ぎず、誰もが知る古典作品
や有名俳優が出演するもので占め
られているのが現状という。

この作品をフランスへ持って行
くにも、たとえフランス作家のも
でも日本人の俳優による日本語
の舞台としてこのままフランス人
に観せるのでは、興行的に困難だ
と彼らは言う。アクションもない
台詞劇に加え現代劇という限界が
そこにある。パリやマルセイユに
滞在する日本人を相手に観客動員
を考えなければならぬだろう。

しかし次なるステップとして日本と
フランスの現代演劇の交流を考
え、たとえお互いが片言のフラ
ンス語、片言の日本語でつくる舞台
があってもいいのではないだろうか。
そう提案すると、ブイソンさんの
瞳の奥が光ったような気がした。
今回の舞台が発端となって日仏
両国における新たな演劇の可能性
が生まれることを期待せずには
いられない。

A propos de nos projets...

最近の事業から

「世界の聖なる音楽」フェスティバル 竹が奏でる日仏のクラボレーション

南仏マルセイユから東へ約20kmにある小さな村には、13世紀に建てられたサン・ボンス修道院が森の中で静かに佇んでいる。9月12日ここで「世界の聖なる音楽」フェスティバルの最後を飾るコンサート、竹管楽器と雅楽のクラボレーションが行われた。

このフェスティバルは今年で4回目。6月から9月までの12週間毎週土曜に演奏会が開催され、週ごとにスペインやトルコなどから招かれた世界のアーティスト達がそれぞれの「聖なる」音楽を演奏している。



すずめている。フランスと竹との組み合わせはイメージがしづらいが、聞けばあるフランス人の篤志家が東洋から持ち帰った竹がマルセイユ近郊のアンデューズに大繁殖しているのだという。

この日仏竹管楽器のクラボレーションにはフランス人作曲家リュシアンゲリネル氏も一役かっている。様々な受賞歴を持つ氏の手によって、古い起源を持つ雅楽器と新しく生まれた竹楽器との共演にフランスのエスプリが融けこんだ美しい作品ができあがった。

日本からは「伶楽舎」所属の3名の雅楽奏者たち（笙、龍笛、篳篥）が招待され、古典曲だけではなく、フランスのパンブローケストラとの共演を披露した。このグループは1994年に矢吹誠氏がフランス人ミュージシャンとマルセイユで結成。竹で独自に製作したマリンバやジェゴグなどを用いて、創作活動はもとより、地元の小中学校で竹楽器による音楽教育を

日本人の現代作曲家の作品も演奏しているが、この作品については「やはり最初は西洋の音楽を作ってきた人の曲だという印象を受けました。初めは苦労しましたが、現地でパンブローケストラと一緒にリハーサルをくり返して何とかうまくいったと思います」と、ほっとした表情で語った。

フェスティバルの主催者であるブッシュ・ド・ローヌ県の担当者

はこの企画の趣旨についてこう説明する。「フランス人の多くは聖なる音楽と聞くと教会の「聖歌」をイメージしがち。この概念をもっと広げる意味でもインスタルトメンタル音楽を中心に紹介することに努めています」。単なる音楽の紹介にとどまらず、地元アーティストたちとのクラボレーションを積極的に応援していくのもこのイベントの特徴だという。

夕方6時にスタートしたコンサートが1時間程して日暮れ時を迎え敵かに終了。と同時に「ブラボー!」「竹からこんな豊かな音が出るなんて」「楽譜がぜひ欲しいわ」などの感想が観客の口から次々と飛び出す。早速舞台にのぼり独創的な楽器のつくりに興味を寄せる人も。

他の樹木に比べてはるかに生育が早く、繁殖力が強い竹。有効利用すれば森林の乱伐も防げるのではないが、21世紀に向け自然との共生を考える時、貴重な存在になるだろう。

フランスの人々が、竹の持つ様々な可能性を身近に感じたいに違いない。

Petite note

編集後記

パリでニコラ・パタイユの「キャバレー・ジャポネ」を見た。日本の「寄席」である「あくび指南」などの古典落語が見事にフランス語で「演じ」られた。異なる文化が融けあい昇華し、新たな創造が誕生する。

(M)

笹川日仏財団ニュースレター

La Lettre

1999年9月発行 Vol. 3 No. 3
 発行人：富永 重厚
 編集人：関 晃典
 発行：笹川日仏財団
 〒108-0073 東京都港区三田3-12-12
 TEL：03 (3769) 6252
 FAX：03 (3769) 2090
 E-mail：matsugam@spf.or.jp
 http://www.spf.org/ffjs/



プロジェクト・カレンダー

99年10月〜12月

- 10月5日〜8日
 - 《第6回日仏材料科学セミナー》
 - 《先端材料の力学物性改善のための微細組織設計》
 - 同セミナー実行委員会/於ボワティエ
- 10月7日〜9日
 - 《創作展「高山右近」フランス公演》
 - 《時代と様式の壁を超えた創作能》
 - 高山右近フランス公演実行委員会/於パリ
- 10月14日
 - 《日仏パネルディスカッション》
 - 《日仏における企業とNPO》
 - 現状と提言/パリクラブ/於東京
- 10月23日〜11月12日
 - 《アノネー 奈良高校生交流》
 - 《日本語を学ぶフランス人高校生の日本研修旅行》
 - 奈良日仏協会・奈良県立高取高校・東京事務局/於奈良
- 11月1、5、8日
 - 《俳句・和歌を主題としたフランス歌曲の潮流》
 - 《音楽・美術・文学での》
 - ジャポニスムの研究と発表/俳句・和歌による二十世紀音楽研究会/於松本、東京、京都
- 11月4日〜6日
 - 《ネオ・ジャパネスク99》
 - 《伝統と現の融合による未来への新提案》
 - ネオ・ジャパネスク'99実行委員会/於パリ
- 11月13日〜18日（東京）
 - 《悲劇フェードル》公演》
 - 《ジャン・ラヌヌ没後30年記念公演》
 - 空中庭園/於東京、パリ
- 11月24日〜26日
 - 《一幕劇スベアリア》フランス公演》
 - 《高野克己が描くホラ・サスペンス》
 - スベアリア上演委員会/於パリ
- 12月上旬
 - 《日仏パネルディスカッション》
 - 《原子力エネルギーをめぐる》
 - 日仏協力の展望/パリクラブ/於東京